# 分子マーカーによる播種性血管内凝固症候群の病態解析


| メタデータ | 言語: jpn |
| --- | --- |
| | 出版者: |
| | 公開日: 2017-10-06 |
| | キーワード (Ja): |
| | キーワード (En): |
| | 作成者: 朝倉, 英策 |
| | メールアドレス: |
| | 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/2297/15082 |

| | |
|---|---|
| 学位授与番号 | 医博乙第1196号 |
| 学位授与年月日 | 平成5年1月20日 |
| 氏　　名 | 朝 倉 英 策 |
| 学位論文題目 | 分子マーカーによる播種性血管内凝固症候群の病態解析 |
| 論文審査委員 | 主 査　教 授　松 田　保 |
| | 副 査　教 授　小 林 健 一 |
| | 教 授　竹 田 亮 祐 |

## 内容の要旨および審査の結果の要旨

各種疾患に合併した播種性血管内凝固症候群（DIC）66例を対象に，凝固線溶分子マーカーによる病態解析を行った。血管内凝固活性化の鋭敏な指標である血中トロンビン－アンチトロンビンⅢ複合体（thrombin－antithrombinⅢ complex，TAT）は全DIC症例で高値を示し，とくに急性前骨髄球性白血病（acute promyelocytic leukemia，APL）および敗血症に合併した症例では顕著であった。線溶活性化の指標である血中プラスミン－$\alpha_2$プラスミンインヒビター複合体（Plasmin－$\alpha_2$ plasmin inhibitor complex，PIC）は，APLで最も高値であった。血中PIC／TAT比は，APL，APL以外の急性白血病，固形癌で高値を，敗血症で低値を示し，前者は線溶優位のDIC，後者は凝固優位のDICと考えられた。血中の組織プラスミノゲンアクチベーター（tissue plasminogen activator，t－PA）とプラスミノゲンアクチベーターインヒビター（Plasminogen activator inhibitor－1，PAI－1）との複合体（t－PA／PAI）は，多くのDICで上昇したがAPLでは上昇はみられなかった。t－PAとの結合能を有し線溶活性化を制御している活性型PAIは，多くのDIC症例で上昇（敗血症に合併したDIC症例で最も上昇）したが，APLでは上昇がみられずt－PAとの間で低レベルでバランスされていると考えられた。血管内皮障害の指標と考えられている血中トロンボモジュリン（thrombomodulin，TM）は，多くのDIC症例で上昇（敗血症に合併したDIC症例で最も上昇）したが，APLでは健常人と比較して有意差はみられなかった。DIC66例において同時に測定した血中活性型PAIとTMを比較すると，両者の間には有意の正相関がみられた（$r=0.612$，$P<0.001$，$n=66$）。DICを多臓器不全（multiple organ failure，MOF）の有無で比較すると，血中活性型PAI，TMともに，MOF合併例では非合併例に比較して有意に高値を示した（ともに$P<0.01$）。DICより離脱しえず死亡した症例では両マーカーはさらに上昇または高値が持続し，線溶活性化に対する抑制（血中PAIの上昇），血管内皮の障害（血中TMの上昇）は，DICにおけるMOFの進展に重要な役割を果していると考えられた。DICの治療を行う上でも，各症例毎に病態の特徴を把握し，治療薬の選択を行うことが重要と考察された。以上，DICの病態の差を分子マーカーの変動と関連づける研究は，これがはじめてのものと言ってよく，血栓止血学の発展に寄与する有意義な研究と考えられた。